
秋永のネタ帳

秋永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

秋永のネタ帳

【Nコード】

N7017L

【作者名】

秋永

【あらすじ】

ここは、プロットの過程で消えていった数々の作品を弔うための場所です。

もしかしたら、ここの作品が日の目を見る日が来るかも知れませんがね。

※タイトル変更しました。いくらなんでも鬱過ぎる

没案その一（前書き）

これは、Wのプロットを書いているときに、ライダー少女を見ていて思い付いたネタ……主人公が明らかに苦勞人臭く、なぜか釈に触ったので没っ!!

没案その一

俺の名は、『千田^{ちだ} 雄理^{ゆうり}』……人外が跋扈する某市に住む、至って普通の高校生

「ゆうちゃあくん、お、おふろが、みぎゃあああ!!」

訂正、お騒がせな幼なじみと住む、至って普通の高校生だ

仮面ライダーキバ・眠りの始皇帝

関東の何処かにある某市……ここはかつて、『ファンガイア』と呼ばれる存在が、人間を文字通り食い物にしていた街だ……本当はこんな物騒な街に居たくないが、高校進学の際に『うちに来ないか』とヘッドハンディングされ、有頂天になったが運の尽き
夜な夜な現れる『掟破り』なる存在相手に命懸けの喧嘩をする羽目になっている

「ゆうちゃん、ご飯まだ?」

「そうだぞ、主夫。早くしないと遅刻するぞ?」

「だまらっしゃい、自活能力ゼロ組が。」

「調子乗ってサーセンした。」

こいつらは、高校進学の際、親達の『汚い大人の取引』で来る羽目になった『紅宅』だ……町外れ一步手前の豪邸

雑草も酷く、俺が来た時は酷いなんてもんじゃなかった……ここに住んでいた『紅 ほたる』、まあ俺の幼なじみの貧相な女の子と変わってるけど粹な奴『キバットバット？世』が慎ましく済んでいたから大変だ

どこぞの赤い悪魔に呼び出された弓兵よろしく、引越一日目で危険な箇所と汚くなった壁紙を全修復……家具まで直して、だれか俺を褒めてくれ

「もふもふ……もふもふ……」

「いただきますを言わんか、ほたる」

「い、いただきます……もひもひ。」

おまえは何処の脱走上等な黄金の公星ハムスターかとツツコミながらも、今日も高校に行く準備をする……勿論、弁当の準備も忘れずに

「いってきまーす♪」

「いってらっしゃい、部活におくれんなよ。」

紅 ほたる（17）……俺に対する警戒心の無い、母性の貧相な可愛い女の子です

ただし、我が千田家的には、係わり合いにはなりたくない……何故なら、彼女は、『音也の血筋』だからだ

アブラゼミやミンミンゼミが喧しい7月……夏季休業二週間前に迫った我が校は、変に『HeatUp』していた女子は遊びに行く算段を、男子はその女子にいかに着いていくを話し合い、中には割り切って野郎だけで遊びに行こうとする始末

「雄理、お前夏季休業中にバイト入ってるか？」

「ああ、叔父さんの会社で仕事の手伝いをするだ。」

「お前、仕事早いし、なにより人を見る目があるからな……予定より給料入ったらなんか……焼肉奢ってくれよな。」

「あいよ、それまでに彼女を物にしちまいな、この色男。」

他愛のない会話、青春を無意味に噛み締める自分……ああ、俺は高校生なんだなと理想の高校生像を楽しんでいた

【ある奴が来るまではっ!!】

そいつは、俺のすぐ後ろ……教室の後ろの教室から入って来た

「いたか雄理、スマンが会計の作業を手伝ってくれ。」

「会長、俺はもう会計委員じゃないっすよ?」

「無理は承知の上だ、頼んだぞ?」

彼女は、我が高校の唯我独尊な生徒会長『名護 唯華』……彼女

は三年生であり、先輩の為、田舎者故に拙い敬語を使わなければいけないが、面倒なのは、一年の時にやった俺の会計の作業を見て味を占めたのか、夏期休業前の修羅場に引き込むのだ

それは、今回で三回目……真面目の仕事しやがれ会計委員と呪いつつ、俺は襟首を持たれて引かれている為、彼女の幸せそうな表情に気がつかなかった

草木も眠る深夜……会計の作業は地獄だった

後任者が余程のサボリ魔だったんだろう……貯まりに貯まって修羅場だった

「かったりい……ああ、俺は植物のように平穏n」

きやああああああ……!!

「植物のようn」

だれかああ……

「オンドレエ!!」

夜の帳が街を包む中、雄理は走り出す……彼は悪魔で人間だ、だが『人より進化した』人間だが

それは『食事の為の狩り』をしていた……古きよき一族の掟に従い、狩りをしていた

だが、それは本当に『自分の狩り』だったのだろうか？

ふと、女性の首筋に牙をかけようと思った瞬間、そう思った

「いや、いやあ……」

『くふふ……では、いただきm』

荒々しい風を人は暴風という……今通り過ぎた『風』も正しくそうだ

深緑の甲殻、黒い肌、朱い複眼……そこに居たのは、かつてファングイアが人類を『滅ぼせなかった理由の一つ』……『AGITΩ』だった

『キサマァ……私の崇高な食Z、ガハァ!!』

『大丈夫かい、レディって……いねえのかよっ?!』

女性は、AGITΩが手を差し延べた瞬間、脱兎の如く逃げてしまった……化け物と言いながら

『いかにいかに……五回目となると慣れて来たな……はあ』

「だから、素直に私の力を借りればいいものを……雄理よ、そんなもののけのような姿でなくても、人助けは出来るぞ？」

ふと目の前に、白銀のような仮面をつけた蝙蝠？である『キバットバット？世』がいた……こやつは、雄理の幼少期から周囲をうろつき、事あるごとに力を化そうとするが、しかし雄理、借りも無い

相手に力を借りるのは嫌う性格だった

『五月蠅いなっ!!』

『ガフウ?!』

今のうちに仕留めようと駆け寄るファンガイアは、AGITΩに変身……した雄理に回し蹴りを喰らい吹き飛んだ

『たくよお……掟とやらを守らない奴は……処刑されるんだろ?』

『ひい?!』

AGITΩの紋章が左足に集まり、赤く、熱を帯びたように輝くそして、介錯をするように蹴り込み、ファンガイアが成す術なく消滅した……本来、ここで『ライフエナジー』と呼ばれるエネルギーをファンガイアは放出する……だが、それは塊ではなく粒子として、大地に帰っていく

『ふん、下らない奴だ……大方、新しい掟に馴染むとかじゃなく、流されただけでの犯行だろうよ。』

「ほう、よくわかっていないか……やはり貴様、王の素質があるんじゃないか？」

『よしてくれ、俺は誰かの上に立つべき者じゃ無い。』

?世の言葉に疲れ気味に答えながら、帰ろうとすると……誰かが目の前に立ち塞がる

「見つけたわよ……はぐれファンガイアっ!!」

「びびっとお仕置きだぁ!!」

俺の愛車の『ホンダ D N・01』に跨がり、颯爽と現れたのは
我が貧相な幼なじみ……紅 ほたるとその相棒の？世だった

「ぎゃぶっ!!」

「変身……」

何らかの音波を発しつつ、ほたるの姿は普段着から紅いレオター
ドに耳らしき物を付けた、露出満点の女の子のすべき姿では無かった

『どうやら、（情操）教育をやり直すべきだな……君は。』

とりあえず、他人の振りを決め込む雄理……同居人が痴女とは信
じがたいが、認めざるえない……説得出来そうな？世も消えていた
し、適当にあしらうのを決め込んだ雄理だった

拳を振りかざしてから30分……有効打を決められず、かと言っ
て反撃もされない……傍から見たら、コスプレ少女が怪人と戯れて
いるように見えるだろう

「こうなったらっ!!」

「ウェイク……アップっ!」

多分大技なのだろう……周囲は満月だった空が三日月になり、ほとたるの右足のブーツの鎖は飛び散り、紅い光を放っている

『成る程、たいした隙を作ってないのに、そんな大技うてるのか？』

「はれ？ うにあああ？！」

ほとたるの右足に集まる光が集まり切る前に、ほとたるを川に投げ込む俺……一昨日きやがれ半人前えっ！！っと台詞を残し、DN・O1まで戻ってほとたるを探す振りをする俺……多分今頃、びしょびしょに濡れているだろう

「えうう……」

「川に落ちるなんて、馬鹿な奴だなあ……全く、俺より先に帰ったお前が俺より遅いもんだから心配したぞ？」

「っへ？？」

なぜ、俺がバイクを押しているのかとツツコミたいだろうほとたるだが、無断で俺の愛車を乗り回したのをばれまいと必死なのだろう「だから、ドジッ子属性が深刻なお前が、こんな深夜まで出歩いているから心配した、と言っているんだっ！！」

「え、えへへ……ごめんね。」

「ごめんで済んだら、警察いらんはボケっ!!」

「あいたっ?!」

スコンと一発、ほたるの頭にげんこつを落とす俺……だけど、この子を守りたいなという漠然な願いを胸に秘めているのは秘密だ

没案その一（後書き）

キャラ設定

- ・千田 雄理
- ・高校二年生・男
- ・某高校で重宝される元会計委員
自身の能力『答えを出す者』アンサートーカーのせいで、仕事が速いために、クールな美人で有名な『会長』に目を付けられた青年
- 時折、殺人鬼臭い台詞をはくが無関係
- 人類の進化態『AGITΩ』へと変身し、夜な夜な襲ってくるファ
ンガイアを狩る……姿はまんま『アナザーアギト』
- 『雄理』の元ネタ

- ・紅 ほたる
- ・高校二年生・女の子
- ・ドジッ子を絵に描いたような少女……その貧相な胸故に雄理に恋愛対象外にされる不憫な少女
- 一応、小さいときに助けてくれた雄理に惚れとるか考えてました
- 仮面ライダーキバたんとか言えば、わかる奴にはわかる

- ・会長（名護 唯華）
- ・高校三年生・女
- ・素直クールを絵に描いたような女性……ボンキュッボンなボディは、雄理をガシガシ揺さぶる回す……唯我独尊を地で行き、ライバルを寄せ付けない天性の才能を持つ
- 一応、素晴らしき青空の会の執行人の一人であり、イクサを継承した者とか考えてました

・キバットバット？世

サブタイトル『眠りの始皇帝』とは彼の事……初代キングに仕えた彼は、息子である二代目キングの殺害に合い、姿を消していた『白夜のキバの鎧』を持つ

あんまり、キバの力を使いたがらない雄理をあの手この手でキングにしようと考えているようだ

以上、こんな事を考えている時期が……私にもありました。

没案二（前書き）

リクエストがあつたので、フエイトを書いてみました……約一日で書いたので、クオリティは保証しかねますが

没案二

『火』……それは、人類が手にした最初の力である
力という点において、これほど多様性に優れた力はないだろう
戦闘を仮定しよう……敵が近くにいれば、直接火だるまにしてや
れば良い、出来れば、油のような引火性の物もセットなら好ましい
遠くなら、辺り一帯を火の海に変えれば良い……隠れていたとして
も、焼き殺せるから

もう一度言う、『火』とは、多様性に優れた力だ

F a t e / S t a y N i g h t — L l g m a S a n g
r e

魔術師やら吸血鬼やら、ふつつーに居る世界、凶々しい大剣を肩
に担いだ一人の青年……否、『人の皮を被った何か』が上司に命じ
られた標的を焼き尽くした

「これで最後か……安いもんだな。」

辺りは、炎に吞まれ、町は火の海と化していた……教会の異端児
やらなんやらが集まるアウトローな組織、『埋葬機関』の末席……
いや、パシリの青年である『ユーリ』が犯したものだ

この町は、『死徒』と呼ばれる一般的に吸血鬼と呼ばれるゲスに
食い散らかせ、さながらゾンビタウンと化していた……捜せば無事

な者も居るかもしれないが、『面倒だから』皆、焼き殺した

「ちっ、唇に脂がこびりつく感じがムカつく……火力足りなかったか？」

イラつきを隠せないように、肩に担いでいた凶々しい大剣を振るうと、辺りの炎はそれに応じるように火の勢いを増していく

「さて、後は……ちっ、生き残りがいやがるのか、めんどくせえ……」

青年は大剣を担ぎ直すと、夜とは思えない程に明るい闇夜を駆けていく……人とは思えない速度で

――
――
――

男には、夢があった……自らの街を作り上げ、死徒として名を上げ、ゆくゆくは自分の国を作るという夢が

だが、そこには生きた者はおらず、人が『死都』と呼ぶものだが男は苦勞こそしたが、なんとかある村を襲い、村人皆を自らの奴隷とし、街と呼べる規模まで大きくした

なのに、それは一晩で崩れ去った

「何故だ……何故私の街が燃えているっ?！」

突如、夜空に現れた小さな火球……それは奴隷の一人に食らい付くと、瞬く間に辺りを喰らい尽くした

奴隷達は瞬く間に灰となり、街は焦土と化していた

「ぐう……くそっ?! どこのどいつだっ! 私の街を焼いたのは
っ!!」

「へえ、てめえがこの街の頭か……」

焼け落ちる館の中、男は吠えろと、それに応えるように扉が蹴り
飛ばされ、凶々しい大剣を担いだ青年が立っていた

「ほう、貴様かぁ……」

「糞ったれな世界は飽きたろう?」

微妙に話が噛み合わない……青年の眼は緋色をしており、辺りの
炎に照らされ輝いている……狂気の光が

「ふう、私も馬鹿ではない、貴様……私の奴r」

死徒の男が、何かを言い切る前に、左半身が灰になる……青年が
いつの間にか接近し、大剣が男の体を凪いだのだ

吹き飛ばされた男は、血まで灰になり、一連の流れに理解の範疇
を越えているようだ

死徒は、強かれ弱かれ、人間を遥かに越える身体能力を秘めてい
る……死徒の男は、特別な力が無い代わりに、身体能力は下級の死
徒を遥かに凌駕していた

なのに、青年の初動さえ『見えず』、ぶざまに斬り飛ばされていた

「悪いが、我が儘な主がいるんで……貴様ら『旧神』の懐の連中
より遥かに面倒な主がな。」

一閃、剣を振るうと死徒は灰になり、断末魔すら上げずに消えた

「たく、お疲れ様く皆帰っていいぞおく」

青年が大声で一言、街を覆っていた炎は名残惜しそうに消えていく……青年が扱う炎はただの炎じゃ無い

かつて、この星を支配していた者達、グレート・オールド・ワン『旧支配者』の一角、炎の『クトウグア』の『生きた炎』と呼ばれる今この星を支配する理から外れた炎である

青年『ユーリ』はある日を境に、クトウグアの眷属『火の精』となり、諸事情で宇宙の果てに幽閉されたクトウグアの命令を受け、動いていた

青年が欲したものは『力』、対価は『魂と命』……人の皮を被った何か……青年は今、生きてはいない

だが、生きた炎の力をその身に満たす事で、生きているように見せ掛けている

青年が歩きながら回想していたら、突如声が聞こえる……焼き尽くした筈だ

生存者なんぞいない筈だった……なのに

「生きている奴が居る……へえ。」

棺桶に寝かされている少女がいた……白髪に透き通るような白い肌死徒かと思ったが、血が通い、体温がある

「どうするよ……俺？」

洗礼名『ユーリ』、教会で実力さえあれば良いと言うトンチキな

集団『埋葬機関』でパシリをしている

彼は、とある街の『消毒』を担当し、謎の生存者を保護

生存者……少女の名は、『イリヤスフィール・フォン・アインツベルン』は事故でこの街で監禁されていた

少女の目的は、霊地『冬木』で行われる『聖杯戦争』に参加し、勝つ事

皮肉にもユーリは、彼女を介して自分の仇の場所を知った……死んだと思った兄『シロウ』の居場所を

霊地『冬木』……とにかく、魔術的に重要な土地で、魔術師的には手放したくないらしいが

「ま、人様に迷惑かけなきゃ俺は来ないわけで。」

ユーリ……いや、こちらでは『芦原 雄理』あしはら ゆうりは冬木の地で好物の安物のタバコを吹かしながら歩く

真っ黒な髪に黒いサングラス、コートのような神父服を着た青年は、タバコをくわえながら歩いていた

「住所はここら辺か……もう、気分は日本に観光に来た外国人だぜ。」

一応肉体は日本人だが、その身に流れる血は、『Lima Sanguis』……自称している通り名だが、外気に触れたらたいはい燃える

普段は皮膚のしたに施した術式で燃えないように抑えている……燃えたら最後、埋葬機関でも一目置かれる姿になってしまう為、細

心の注意を払っている

「ふいい……疲れないけど、慣れない土地は精神的に堪えるな。」

まあ、肉体は人外でも、神経は人間くさいようで、雄理は公園のベンチに腰掛ける

「はぁ……だいたい見て回ったし、明日から仕事に学校だぁ……シエル先輩とかマジぶざけんなし、一応大学は出たぞ。」

ここにいない人物に呪詛の言葉を紡ぎ、好物が食えなくなれば良いと思い、ベンチから腰を上げる……

頭をかき、あからさまに面倒臭いという表情で暗闇の公園の一角を睨み付ける

「ほっほっほ……勘は良いみたいだの。」

「ジジイ……何しに来やがった？」

暗がりからはい出る、いや、湧いて出るように老人が一人現れる
彼はこの世界で数少ない『魔法使い』と呼ばれる存在『キシユア・ゼルレッチ・シュバインオーグ』……『万華鏡』カレイドスコープやらなんらと持て囃されているが、ただの趣味の悪い爺だ

「いいや、お主に耳寄りな情報じゃよ。」

「怪しいな、アンタが俺が有利になる情報を持って来るとは思えねえ。」

近寄る翁を炎と共に現れた凶々しい大剣……業火の魔剣『レーヴ

アテイン』を向ける

レーヴァテインの表面は、大気を焦がして、空気が揺らめく

「ほほ、流石は末席にいるだけはあるわい。」

「ぬかせ、アンタは焼いても死なないだろうが。」

ゼルレッチもいつの間にか持っている美しい宝石のような剣『宝石剣』でレーヴァテインを受け止める……が、レーヴァテインを受け止めている刃の部分が徐々に溶けていく

「ほ？」

「くたばれっ!!」

レーヴァテインが、ゼルレッチを切り裂き、この間の死徒のように灰にしていたはずだった……そう、はずだったのだ

「あぶないのお……久々に冷や汗かいたわい。」

「ちっ、用件はなんだよ？ さっさと行ってどっか行きやがれ。」

憎々げにレーヴァテインを炎にしてどこかに放り投げる……炎は散り散りになって消えていく

それを確認してゼルレッチも宝石剣をしまう……雄理はまだ、『人』として敵わないと察して臨戦体制を解いたようだ

「この街で行われるイベントは知っておるな？」

「聖杯戦争だろ？ 駐在の神父は仕事しねえから俺が代わりに監視

に来たんだろうがよ。」

そうなのだ、大魔術と言うか、魔術に関する学が無い雄理にはさっぱりだが、埋葬機関の下っ端に仕事が投げられたのだ……それは『聖杯の監視、ないし破壊』である

前回の聖杯戦争の際、冬木の地は盛大な大火災で焼かれている……雄理は当事者で、未だに鮮明に覚えている

――
――
――
焼け死ぬ両親、どこかに消えた兄、体を焼かれて助けを求める人の声……雄理は無意識にその中心に歩いて行った
そこで彼は、わずかに残る『穴』に気が付いた……その穴からはこの世の物とは思えないほどの熱気が出ていた
雄理は、何故か穴に近づき、手を伸ばすと

『小僧、私の元に来い。』

その一言をきっかけに、雄理の世界はがらりと変わった……息が詰まりそうな程の熱気、辺りには星が煌めき、目の前には紅蓮の髪の毛の女性がいた

『小僧、名は？』

何故ここにいるかと言う疑問の前に、雄理の思考は止まっていた……何故なら、女性の髪は先程まで雄理少年が居た街を焼き払った炎と酷似していたから

『ふむ、名を聞く前に私の事が気になって仕方がないようだな。』

心底愉快そうに、尚且つ妖艶に女性は微笑むと、雄理少年を抱き寄せる

『私の名はクトウグア……本来は違う姿だが、君が怯えないようにこの姿をとらせてもらった……さて、キミノナハナンダネ？』

答えたら最後、永遠に戻れない闇に引き込まれそうな気がした……だが、雄理少年はにたりと笑うと、真名を明かした

「俺の名は『■■■■ 雄理』……『復讐』を願うものだっ！！」

力強く、凜とした声で答えた……クトウグアは、一瞬キョトンとした顔をしたが、獰猛な……肉食獣さえ逃げすような笑みを浮かべると、離れていた雄理を抱き寄せ、顔を間近まで近づけ、値踏みするように見る

『ふむ……知力、体力、精神力……問題無しか小僧、私の物になれ。代わりに可能な範囲でなんでも願いを叶えてやろうぞっ！！』

そして、心底愉快そうに笑うと歌うように雄理に対価を教える……自らに総てを捧げろ、代わりに願い叶えてやると言っているのだ

「なら……」『なら？』

少年の目には、紅蓮の炎が宿っていた……憎いものを、この世の総てを焼き尽くすような炎を

「力と時間をくれっ！ 俺の総てを奪った奴ら……魔術師と兄に復讐をするだけの力をつっ！」

少年の独白は聴き遂げられ、少年は人間では無くなった……その身に流れる血は全て炎となり、人の理を食い破ってしまった

『小僧……いや、ユーリよっ！ 私は君を歓迎しよう、盛大になっ
っ！』

こうして、彼の炎の様に情熱的で、そして不定形な人生？は始まったのだ

――

――

――

「さて、良い感じに憎しみが戻ったところで、お前に良いの物やろう……なに、対価はいらん、可愛い愛弟子の為じゃからの。」

「減らず口が……って、つうっ？！」

ゼルレッチは雄理の左手を掴むと、『何か』を埋め込み、刻み付ける

「なんつつう悪趣味なタトゥー彫りやがるっ！」

「それは大事な印じゃ……貴様が敵を見つける為の、巡り会うための大事な証じゃからの、それを努々忘れるでないぞ？？」

「待ちやがれこらあっ!! 戻ってきやがれ禿爺っ!!」

虚しい絶叫は木霊し、後には青年ただ一人が残された……こうして彼の『ユーリ』の聖杯戦争が始まったのだ

「へえ、面白そうながきだな……ま、まだ契約してねえみたいだし関係ねえか。」

朱い槍を持った男が一人、遠くの電柱から青年を見ていた……

続く……？

没案二（後書き）

かなり？性格の悪い雄理でした……この時の構図を思い出したため、採用案での惨劇（笑）が起こったわけですが。

ちなみに、芦原雄理は偽名です。

没案二の続き（前書き）

何故書いたし続きとか言わず、BBSを眺めるくらいのノリで読めばいいと思うのよ。

没案二の続き

黒髪の男……黒い神父服を身に纏い、黒いサングラスで紅蓮の瞳を隠していた……かれの名はユーリ、偽名は芦原雄理で、彼は夜道を散歩していた

彼が今冬木の地に居るのは大魔術の儀式『聖杯戦争』の監視だが、実際はユーリの休暇がメインだなのに彼は……

「死者は死者を呼ぶ……か、見た目は簡単な起き上がり、ただし親がいるような気配無し……みたいだな。」

彼の目の前には、ドロドロに腐った死体が歩いて来ていた……ただ、統率は取れておらず、本当に群れを成しているだけのようだ

「たく、誰かは知らんが……こんな汚れを土地に貯めとくなんざ、録なやつじゃねえな。」

独り言の内容は、死体達への哀れみから、じょじょにこの死体達が『起き上がり』になった原因を放置しているこの土地のセカンドオーナーへの悪口へとかしていく

「ラストっ!!」

最後の起き上がりを、金属パイプで吹き飛ばし、火葬してやってやる……起き上がりは、汚れを孕んだまま、火葬されなかった死体になるものであり、日本では『殺人』以外でなるのは到底ありえない筈だ

「さて、面倒な……面……倒な……」

目の前にはいずる何か……見た目はデカイ芋虫……色は人肌のようで、蒸せつかえるような血とナニの臭いがする……

(^ω^＃)

「飢えず、乾かず滅びされ……」

逃げていた虫に火葬に使った礼装とは違う礼装を投げる……オリジナルと言うか、改造しただけの黒鍵（ピアノの黒鍵のような柄の剣）だが、『生きた炎』を付加して投げ付ける……生きた炎は貪欲に虫に食らい付くと、一瞬の内に消し炭にする

「んじゃ、本体とのパス（絆）も見えたところで、教会用語で火葬しに行きますかな……クプツ」

下らない親父ギャグで自爆するユーリ……火葬とは則ち、『消毒』

の事だ

『食事』に行っていた虫が残らず焼き殺されたようだ……誰かは知らないが、私について知らない者だろうが容赦はしない、何故なら、私には使命があるからだ

『そんな……ちょ……』

玄関で孫娘がやって来た人物に対応していたが、なにやら様子がおかしい

「いよ、あんたが起き上がり共の原因だろう？」

「こんな夜遅くに、人様の家に土足で上がり込むとはどんな用件じゃ？」

歳老いた翁の鋭い睨みを華麗にスルーし、雄理は口を開く……その表情は怒気を孕んでいた

「翁……あんたは質問に質問で返せと教育されており、自分の子や孫にそう教育されているのか？」

「ほお？」

「質問で質問で返してんじゃねえぞっ！ この屑虫がつっ！！」

よくわからないことでキレた雄理は、翁の……まどうやうけん間恫臓硯の左手を
突如焼き払う

質問したのは、相手に理解させる為……もう、警告の必要はない

「貴様あ……よくも……」

「おお、きめえきめえ。手から芋虫湧いてんじゃねえっすか？」

「ぐぎゃあっ?!」

今度は左足が焼き尽くされる……臓硯……いや、マキリの長たる
『マキリ・ゾオルケン』は無惨に転がっていた

「ん？ ……ああ、誰かと思えば妖怪マキリさんじゃないですか。
一応、機関にも見付けたら焼いとけて言われてるしちようどい
いや。」

「さて、貴S」

綺麗に焼かれるゾオルケン……何故か、炎で焼かれた後には残る
筈の黒い焼け跡は微塵も残らず、辺りにはスス臭い臭いと肉が焼け

た臭いが充満していた

「虫の丸焼きいっちょ上がり。」

「油断したな？」

突如、後ろから首を締められるユーリ……部屋の隅に置かれた鏡で見たらそこには、玄関で気絶させたはずの少女、『間桐桜』まとうさくらがいた様子は先程の猫かぶりとは打って変わり、ジジ臭い、過齡臭が漂ってきそうな感じだ

「成る程、だまってりや見逃してやったのに。」

「なっ?!」

まるで、うざったい友人が掴んで来た手を振り払うようにた易く桜?の全力で締めていた筈なのに、こうも簡単に振り払われたのに動揺しているようだ

「あんた……虫翁だろう？ まあどうでもいいや、日本にはよ……自業自得っていう、いー諺があるらしいな。」

「だから、なんだ……」

ユーリは、ニヤニヤと不適な笑みを浮かべて懷からタバコを出し、火を付けてふかす

「まあ、何がいうたいかって言うとおんたがそうじゃね？」

「が、あ……馬鹿な、私は……私は……」

「無差別に一般人を襲い、血肉を喰らって来た妖怪だろうが……それ以上堕ちても馬鹿に見えるだけだぜ？」

ユーリに頭を掴まれた桜……いや、何故か彼女を操っていた間桐臓硯は戦慄していた……見た目は桜やその兄と同等かそれより低いくらいなのに、自分の、『魔術師の常識』がことごとく効かない
一番の謎は、対象しか焼かない炎だ……自分の体を焼き払ったのに、家には全く被害は出ていないのだ

「因果流転……とまでは行かないが、選んで焼くのは以外と簡単なんだよね。」

「なんだこれは……体が熱い……熱い……焼けて……しま……う。」

白い湯気が桜から立ち上り、そのまま気絶する……ユーリは、桜を床に落とすと、下らない物を見るような目で踵を返す

「安らかに眠れ……俺が眠れない分な……」

ユーリの夜は、こうして始まった……紅蓮の瞳が月を見ると、やれやれと頭を掻きながら街を闊歩しだした

途中、夜遊びしている中学生を捕まえては、真面目に説教をした
りする辺りは真面目に神父をしているようだ

夜道を歩き、裏路地を突き進むユーリ……特に目的はなく、無計画に歩き回っているだけだ

「ん……んっ?!」

裏路地を抜けた先には、二つの膨大な魔力……いや、比べたら悪いが主には到底及びようがないが、魔力の塊がぶつかっている
方や紫の髪で目隠しをした女性、方や金髪で鎧を着た少女……二つ共、そこそこの神秘のぶつかり合いだ

「ふ、成る程ね……成る程成る程……ミツケタゾ、シロウ。」

急に辺りの空気がたわむ……神秘のぶつかり合いは消え去り、辺りの夜の闇は、別の闇に塗り潰される

二人の女……多分『サーヴァント』と呼ばれる者達は、異質な存在に気がつく……見た目は神父服で、夜なのに黒いサングラスをし

ている

だが、本当に異質な……いや、怪異なのは、黒い髪の毛が紅蓮に染まり、サングラスは突然溶け、紅蓮の瞳が姿を表す

「お前、シロウだな？」

「あ、ああ……確かに衛宮士郎^{えみやしろう}だけど……お前、何者だっ!!」

士郎……赤銅色の髪をした少年は、先程の異様な光景に警戒心が上がっている

彼の前に金髪の少女が立ち塞がる

「何者だ、貴様っ!!」

「俺かい？ 俺はユーリ……埋葬機関の末席で……」

ユーリの手には、凶々しい大剣が炎と共に現れる

「シロウに全てを奪われた者さ♪」

「「っ?!」」

火柱が一つ、天まで届きそうな火柱が立ち上がった
灰色で……不気味で……ユーリの心を示すような炎が

没案二の続き（後書き）

ユーリは、単体火力が真祖並のきめえ仕様でした。

地球から見たらならフツーでも、世界から見たら異物であるユーリは、真祖（黒アルク）によく喧嘩を売られんじゃね？って思ったための苦肉の作

灰色の炎に関しては、『クトゥグア』でググれば分かります。

ユーリのコンセプトは、『騙されたダークヒーロー』でした。
今は一応正統派なダークヒーローですしね。

遊戯王とリリカル（前書き）

どうしてこうなった

遊戯王とリリカル

二人の男児は、真剣な面持ちで睨み合っていた……信じられるのは、持ちうる全てを注いだ『デッキ』のみ

そう、彼等は世界的に大規模な人気を誇るカードゲーム『デュエルモンスターズ』をしていた

跳ねっ毛な少年の場には黄色の鎧を纏う竜が、対して帽子の少年の場はがらりと何もいない

「じゃ、ドラグニティアームズ・ミスティルで二回連続ダイレクト。」

「一回目のダイレクトで負けてるから……強過ぎんだよ、遊理はっ！」

「何、ドラグニティが回るのは稀に良くあることさWW」

「笑いながら言っても説得力に欠けるわっ?!」

取っ組みの喧嘩に発展しないのは、一重に彼等の信頼関係のなせる技だろう

とある公立学校の放課後のがらんとしている筈教室……そこには、何故か黒板に『遊理君さよなら会』とデカデカと掛かっていた

隅っこに『遊理を倒す最後のチャンス』とか書かれていたが、別に会いにくくなっただけで、文明の利器である携帯電話で連絡をいくらでも取れるし、最悪『大会』ですれ違うぐらいはあるだろう

「それにしても、親御さんの転勤とはいえ、高城君が転校しちゃうなんてな……先生寂しいな。」

「あはは、卒業式とか日にちズレたら弄りに来ますね。」

人妻と言うか未亡人臭（一応未婚だし、子供もいないと明言しておく）する麗しの先生ともお別れか……寂しいな
そんな時も男子が『決闘』^{デュエル}を申し込んでくるが、一部の女子が腹パンチで止めていたを俺は見えて見ぬ振りをしていた

「さて、おまえら……俺はちと諸事情でこの地を……童実野町^{とじみの}を離れるけど、生まれも育ちもこの街だし、おっきな大会とか相変わらずこの街でやるから帰ってくるぜっ！」

「」「」「後者が本音だろ？」「」「」

「? o r z」

彼が……『高城^{たかしろ} 遊理^{ゆうり}』が故郷から遠い街、『海鳴市』に引っ越す約二週間前の話であった

風と共に生きる竜や鳥を仲間を持つ『決闘者』^{デュエリスト}が、リリカルな魔砲世界にガクブルするようです

母というか、研究者である母と父は、甘いものが大好きである…

…だが、研究とか関係なく遊理も甘いものが大好きである

「（家の隣が……隠れ家的名店『翠屋』だっ？！）」

糖分を好む決闘者達の間でまことしやかに語られる伝説……雑誌に載らず、その店のケーキは、あまりのうまさに食べる者の魂が熔けると言われる名店『翠屋』……もし、目の前の喫茶店が伝説に伝わる店なら……店ならっ？！

「後……後十五年は楽勝で戦えるな。」

「遊理、早く荷物運ぶの手伝って。」

「はーいっ！」

ひそかな期待とちよっぴりの不安を胸に抱きつつ、彼は引っ越しの手伝いを再開する……この街にうごめく『奇妙な気配』も感じつつも、自分の荷物や服など壊れても自己責任か壊れにくい物を優性して運ぶ

最近の衣装ケースは、キャスターのような車輪が付いている為、非力な子供でも運べる……重いタンス等は引っ越し業者のお兄さんが頑張って運んでいる

「母さん、冬服押し入れ入れといたよ。」

「ありがとう、そろそろ引越し蕎麦にでもしようかしら？」

海馬コーポレーションと言う、エンターテイメント系と言うか社長がエンターテイメントな会社で、俺の父さんと母さんは働いている父さんと母さんは、主にデュエルの演出を盛り上げる『ソリッドビジョン（立体映像）』技術の開発に携わっているらしい……最近、バイクがどうか言っていたのが怖い

「それでは、失礼しましたあ！」

「あら、折角だから食べていけば良いのにい。」

「え、本当っすかっ?! いやあ、たすかんますっ!」

ツヤの無い黒髪の男性が頭を下げると、仕事仲間であろう他の人達も頭を下げる……どうやら、最初に頭を下げた人がリーダーのようだ

「「「「「いただきますっ!!」「」「」「」

皆、一斉にそばを啜る

そばを食べ終わり、休憩タイムにデッキを弄るかと漁っていると、後ろから先程のリーダー格の人が話しかけてくる

「君は、デュエルモンスターズが好きなのかい？」

「はいっ！ 前の学校でも良く皆でデュエルをしていました。」

「よし、なら俺とデュエルしないか？」

「本当ですかっ?! やったねっ！」

お互いの40枚以上のカードの束『デッキ』をシャッフルし、デッキをデュエルディスクにセットして、ディスクに先制と後攻を決めさせる

遊理は先制を取った

Turn 1 遊理のターン

「俺のターン、ドロー……カードを一枚セット、モンスターをセットしてターンエンドっ！」

◇遊理フィールド

モンスター…1体

魔法と罠…1枚

Turn 1 お兄さんのターン

「それじゃ、俺のターンか。ドロー、俺はランドスターの戦士を召

喚して攻撃だっ！」

ランドスターの戦士は、かわいらしい外見に似合わない鋭い斬撃にセットされていた遊理のモンスターは破壊される

「俺の破壊されたモンスターは『ドラゴンフライ』、こいつは戦闘で破壊され、墓地に送られた場合にデッキから攻撃力1500以下の風属性モンスターを特殊召喚出来るっ！」

「く、リクルーターか……」

リクルーターとは、『戦闘で破壊された場合、デッキから一定条件のモンスターを特殊召喚するモンスター』の総称である

特殊召喚とは、通常は1ターンの間に一度しかモンスターは召喚出来ず、これを『通常召喚』と言う

特殊召喚は条件を満たす事で、このルールを無視してモンスターを召喚する事が出来るのだ

「俺が特殊召喚するのは、『ドラグニティートリプル』です。こいつは、召喚・特殊召喚に成功した時、デッキからレベル3以下のドラゴン族を墓地に送ります。俺は、『ドラグニティーブランドイストック』を墓地に送ります。」

「（ドラグニティ……聞いたことねえぞ？　だが、相手に生贄召喚

を許すくらいならっ！） 手札から魔法『地割れ』を発動っ！ 効果で、お前のトリブルを破壊させてもらおうっ！」

「罨発動、『ゴッドバード・アタック』……こいつは、自分フィールド上の鳥獣族を墓地に送り、フィールド上のカードを二枚破壊するっ！」

「何っ?!」

遊理は今、自分のモンスターを破壊するカードに対し『チェーン』と呼ばれる事をした
複雑なルールを省くと、相手のカードに対して妨害したりする事が多い

「破壊するのは、ランドスターの戦士とガイアパワーだっ！」

「く……カードを一枚伏せ、ターンエンドだ。」

◇お兄さんのフィールド

モンスター…0枚

魔法・罨…1枚

Turn—2 遊理のターン

「ドロー、俺は手札から『ドラグニティーレギオン』を召喚し、レギオンの効果を発動っ！ 墓地にいるレベル3以下のドラグニティーと名の付くドラゴン族をこのカードに装備する事が出来る。」

互いのデュエルディスクが投影しているソリッドビジョン（立体映像）でモンスターが再び写される

「さらに、レギオンの効果発動……自分の魔法・罠ゾーンの装備扱いのドラグニティを一枚墓地に送る事により、相手フィールド上の魔法・罠を破壊するっ！」

「つつ……しまったっ?!」

「さらにっ!!」

フィールドがざわめく……遊理は、真剣な面持ちでカードを構え、発動する

「手札の『ドラグニティアームズ―ミスティル』の効果発動……自分フィールド上のドラグニティを一体を生贄に捧げる事で、特殊召喚できるっ！」

「いきなり上級モンスターだとっ?!」

突如、フィールドに突風が吹き荒れる……立体映像の筈のそれは、本当に風が吹いているように感じる

フィールド上のレギオンが光に包まれると、黄色の鎧包まれ、一振りの剣を携えた竜が現れる

「ミスティルの効果発動……このモンスターは、手札から召喚・特殊召喚に成功した時に、墓地からドラグニティと名の付いたドラゴン族を装備できるっ！」

ミスティルの剣に、墓地から現れたのブランディストックが入り込み、ミスティルは剣が増えて二刀流になる

「ミスティルの攻撃……『シュタイン・ツイアシュテールング・アイン』っ！」

「くっ……なかなかやるなっ！」

「さらに、装備されたブランディストックの効果で、ミスティルは二回目の攻撃が出来る……『シュタイン・ツイアシュテールング・ツヴァイ』っ！」

焦ったのか、お兄さんはテンパリながらも手札からフィールド上にモンスターカードを置く

「手札の『バトルフェーダー』こいつは直接攻撃されそうになったら、手札から特殊召喚する事でバトルを強制終了するっ！！」

お兄さんのフィールドに振り子のようなモンスターが現れ、二振り目の剣を自ら発した音波で止めさせる

「く……ターンエンド……」

◇遊理のフィールド

モンスター…一体

魔法・罠…一枚

◇お兄さんのライフ

4000↓3200

Turn—2 お兄さんのターン

「俺のターン……手札から『コストダウン』を発動、これにより手札のモンスターのレベルをこのターン、二つ下げる。俺は、手札の『真紅眼の黒竜^{れつとあまゐす・ぶちつくぐんぐん}』を選択する。」

「レッドアイズっ?!」

「バトルフェーダーを生贄に捧げ、レッドアイズを召喚するっ!!」

遊理のミステイルとは違う、まるですべてを焼き尽くしそうな真っ赤な瞳に、大気を震わせる漆黒の鎧を持つ竜……『レッドアイズ・ブラックドラゴン』が降臨する

「さらに、手札から魔法『黒炎弾』を発動し、お前のライフに2400のダメージを与えるっ!」

「ぐ、ぐぬうう……」

「そして、真紅眼の黒竜を生贄に捧げ……」

レッドアイズの体が、ひび割れて赤い光が漏れ出す……凶々しい
その様子に生を飲むしかない

「現れる……『真紅眼の闇竜』レッドアイズ・ダークネスドラゴンっ!!」

『ぐうおおおおおおっ!!!!』

レッドアイズ・ダークネスドラゴンは、憤怒の瞳を遊理にぶつける……なんか、物凄い怒っている

「手札から、『未来融合―フューチャーフュージョン』を発動し、融合デッキから『F・G・D』を選択……俺はデッキのドラゴン族を五体墓地に送る。」

「（やばい、この意味は分かるっ?!）」

遊理のライフは残り1600……レッドアイズ・ダークネスドラゴンは、自身の攻撃力を墓地にいるドラゴン族×300上がる能力を持つ……つまり

「レッドアイズの攻撃力は、墓地の6体のドラゴンにより、1800上がるっ！いけっ！！」

「ぬあああああ！！！」

レッドアイズから、特大の火球が吐き出され、ミスティルはあえなく焼き尽くされ、遊理のライフは0になる

「あ、ありがとうございました……」

「あ、はっは……頭がアフロになってるぞ。いやあ、ブラフで伏せた『強欲の瓶』でバトルフェーダーを引けて助かったよ。君の攻撃が激しいから焦った焦った。」

彼は、三枚の手札を消費した……残りの手札はブラックアイズとコストダウン……さっきのターン、破壊した伏せ札はチェーンで発動して一枚ドロ―し、真紅眼の闇竜を引き当てたらしい……未来融合は通常のドロ―したんだと

「く、悔しい……」

「あ、あははは……気にすんなよ、中々良い攻撃だったし、もっと経験を詰めば、あんな隙は早々出るもんじゃないさ……」

「はい……あ、あのっ?!」

「なんだい？」

やれやれ、熱中してたら部下がギャラリしてやがるとか『お兄さん』が言っているが、遊理は基本的な事を聞き忘れていたのを忘れていた

「俺は遊理……高城遊理っ！ お兄さんの名前は？」

「俺かい？ 俺は……」

お兄さんは、脱いでいた上着を拾い上げ、ディスクを待機モードにして歩き出す

「城之内克也……しがない引っ越し屋の男だよ。」

「うに……」

城之内は、遊理の頭を撫でてやり、仲間達の元に歩いていった……その様子を遠巻きに見ていた少女がいた

「す、凄い子がいるの……」

彼女の名は、高町なのは……高町と高城……いったいどんな物語

が待ち受けているのやら……それは、作者も知らないっ!!
じゃん (駄目

ネタ的な輝く神話……勇者王じゃないよ

お勤めが終わり、暇になった世界樹の英雄……『ディセンダー』が集まる場所『アインヘリヤル』

たいていのディセンダー達は勤めを全うしたら眠りにつくが、一部の物好きは起きて救った世界を観察したり、または世界樹がディセンダーを作り出せないほど幼い世界を救う為に駆り出される
そして、そんな場所であつて『テレジア』と呼ばれた世界を救つた英雄『レイド』もいた

「やべえ……仕事後の一杯がこんなに身に染みるなんてな……」

「……（お疲れ様と視線を送っている）」

レイド……今は寿命を終えている沢山の世界を作つた世界樹が作り出した風変わりな英雄

翠の瞳に黒い髪、かつての相棒が変した黒い大剣『End of
End of サマ』
Summer』（データ的には某ヒロインの大剣と同じ）を携えて世界を救い続けるダウナー系の英雄だ

「まさかよ、十二連チャンで世界救えとか驚いたね……毎度、レベル下がるし死にたくなるな。」

「……（その割に楽しんでいるだろうと視線を送っている）」

レイドの後輩であるディセンダーがそつと、酒のツマミを追加する
ディセンダーは基本的に子供の姿で世界樹に産み落とされるが、レイドは世界樹がディセンダーと言う免疫が使えない世界に派遣される為、ドンドン歳を食う

その姿は既に産み落とされた頃の面影を少し残すだけで完全にオッサンだ

流石に十二連続で世界救済とかしている為か、油断していたのだろう……世にも奇妙な花が傍に来ていたのに気がつかなかった

《レイドさぁーん、私のお願いに『はい』か『イエス』で答えてくださあい♪》

「待て、お前はどこのアンゼロット……」

次の瞬間、レイドが酒盛りの為に座っていた場所は落とし穴のよう
うに開き、レイドは落ちていった

《世界を……頼みます。》

「……はぁ（心底胡散臭い物を見る目で花を見ている）」

花の正体、それは全ての世界樹の根源である世界樹『ユグトラシル』……レイドを生み出した世界樹『テレジア』の直系の先祖に当たる

一方、落ちていったレイドは順調にレベルが下がっていた
……別に彼のあだ名は下がる男じゃないから勘違いしないように

『グラニデ』……それは、レイドと関わりが深い人物の世界『パスカ』の子供に当たる世界……海が美しく、空が澄み渡る世界だ
そんな世界で、海を渡る船の甲板で一人の少女が世界樹を眺めていた

「カノンノ、洗濯物を干すの手伝ってちょうだい。」

「わかった、ん？」

カノンノと呼ばれた少女は、世界樹を見て何かに気がついたようだ

「どうしたの？」

「世界樹が光ったような……あれ、なにか落ちてくるっ?!」

金色の光が、尾を引きながら落ちている……それは、比較的近くの洞窟に落ちていった

「あ……洞窟に落ちた。」

「カノンノ、助けに行かないの？」

「そうだったっ?! ちょっと行ってくるね、パニールっ!!」

「はいはい、気をつけてね。」

彼女達を乗せている船『バンエルティア号』は、洞窟の入口に進路を取るのであった

「（よくわからないけど、胸騒ぎがする……）」

自分勝手というか、部下をこき使うタイプの上司を持つと、必然的に苦労するのは部下というのは明白と言うわけで、気が付いたら、相棒……愛剣と共に洞窟にいた

「今回は黒ラ○ナさんかよ……俺はユグの着せ替え人形かっての……ふぁ、ねみ。」

レイドの先程までの成熟した男性だった姿は、少年のような……初めてディセンダーとして生み出された頃の姿に近かったが、服装ががらりと違った

黒いコートに黒いズボン……大人しかった黒髪は今はツンツンだ
レイドは、ため息をつきながら大剣を構える……その瞳には、皆

既日食であっても輝く太陽のフレアのような光が灯っていた

「まあ、あれだ……酒盛りを邪魔した貴様ら魔物（注…完全な八つ当たりです）はたった今から死刑宣告じゃこんちくしょお……」

話を通じないのは承知だったので、向かって来た鳥のような魔物を両断し、オウム貝のような魔物は蹴って他の魔物の足止めを使う……動きに乱れも無ければ迷いも無い

本人は、否定したいがそれでもステータス的にはレベル1……彼は圧倒的な数の魔物を技で捌いているのだ

「ラストオっ!!」

黒き魔剣『End of Summer』を担ぎ、手頃な岩に腰掛ける……不意に、遠くから足音が聞こえた

歩幅から言って相手は小柄だが、力強い足音から自分と同じように大きな得物を扱う者であろう……道でも聞いてさっさと任務に移ろうと思うレイド

何故なら彼は……

「（歪んだディセNDERなんか、世界に居るべきじゃないし、この世界のディセNDERが生まれるまでの場繋ぎが俺の役目なんだよな……）」

歪んだディセンダー……『カオスフレア』は、そこにいるだけで世界を歪める……時には英雄、時には支配者……カオスフレアは、この世界においては、いびつな光なのだ

「んゝいないなあ……」

カノンノは、かれこれ30分近く洞窟を探索していた光が落ちて行った方向から言って、この洞窟で間違いないはず……なにより

「魔物が少ない……それに、あんまり好戦的な種類は居なくなってる？」

注意深く観察すると、洞窟の至る所に斬撃の痕跡がある……大きさをからして、大きな剣で間違いないだろうとカノンノは判断した

「んゝ……皆を心配させる訳には行かないし、かといって遭難者を見捨てるなんて……っ?!」

目撃したものは、斬撃の嵐……カノンノも見ることがない魔物が真っ黒な少年を襲うが、手に持つカノンノの剣によく似た黒い大剣を振り回してかつさばく

翠の瞳には、とても強い力を感じる……魔物達が一カ所に集めら

れたと思うと、その少年から瞳と同じ翠の光が放出したかと思うと、魔物達の頭上と足元に魔法陣が描かれる

【秘奥義 滅光破天撃めっこうはてんげきっ!!】

剣を振り下ろすと、魔法陣を繋ぐように、真っ黒な光の柱が魔物達を消し飛ばす

「す、凄い……「レイドと言うんだが、お前は誰だ？」っ?!」

見とれていたカノンノの目の前には、いつの間にか少年がいた……翠の瞳で真っ直ぐにこちらを見つめてくる

名前を名乗り、相手は聞き返してくる……普通のようだが、普通の状況じゃない

これが、彼と彼女の二度目にして初めての出会いであった

………続かない

ネタ的な輝く神話……勇者王じゃないよ（後書き）

レイドは、もともとFFCCの自キャラですが、ノリでTOWRM
2でのキャラ名です。

黒い服装も、黒い大剣も、秘奥義もオリジナルです。
てか、どこの下がる男だし

ネタ的な輝く神話 その二

某世界の守護者な感じに落しめられる某下がる男の気分を存分に味わいながら世界に召喚された男……『レイド』

ディセンダーとは似ても似つかぬ黒い姿……下手したらラ○ナさん2Pカラーと言うより、アサ○ムに近いかもしれない……魔○剣デ。スキ。リ○ーとか洒落にならんかもね

「あの、ちゃんと話聞いてるんですかつ?!」

「いや、全然聞いていなかった……」

さて、またレベルが1になってしまったが……幼い世界樹——なんかロリみたいだが、木の時間単位で言っているから多分ロリではないと思うが——の為に頑張って見ますかな

にしても、コイツ……カノンノを見てると懐かしくなるな……本当、まだ楽しかったあの頃みたい

ネタ的な光り輝く物語 その2

第一印象だけは素晴らしかった……ぱっと見はかっこいいし、剣の腕も立つ

普通の者では到底扱えない『秘奥義』まで扱って見せた

それも、この世界では類い稀な『闇の力』を持っている彼の瞳はどこか虚空を見ている……こうして、自分が話し掛けても、ぼろ

としていて反応を返してこないし、あまつさえ聞いていなかったなんて言うのだ

これが、パニーニが言っていた『甲斐性無し』と言う人種なのかと思ったカノンノは突如、そんな甲斐性無しの彼に抱えられていた

「ちょ、何をっ?!」

「黙ってろ、舌嚙むぞ?」

カノンノを抱えたレイドは、その場から跳躍し、背後に現れた驚異から彼女を庇う……背後には、この洞窟にいない筈の魔物……『ベヒモス』がいた

体には矢のような物が突き刺さり、闇のようなものが漂っている
溢れんばかりの闇の気配に気圧されるカノンノ……レイドは、カノンノを庇うように剣を構える

「成る程、この程度の負を処理出来ない程に世界樹は弱っている……いや、負が多過ぎるのか?」

【ヴォオオオオオ!!!!!!】

突如、殴り掛かってくるベヒモスをいなし、腕を大剣で跳ね飛ばして距離を取る

「喰らえ……剛・魔神剣っ!!」

大きな一撃で巨体が揺らめくベヒモス……見た目はソリッド（物質）系なベヒモスだが、その実はスピリチャル（心霊）系なのであり、存在を揺さぶられる程の一撃にふらふらしだす

「とどめだ……極彩に散れっ!!」

縦一閃……レイドの剣をくらい、ベヒモスは元の有り触れた『汚れ』になって霧散する

大剣から汚れを掃うように二三振り、背中に納める……その姿は、まさに歴戦の戦士だった

……だが、レベルは1であ r（r y

「凄い……あんな魔物を一瞬で。」

「さて、とりあえず洞窟を出ようか？ ……えっと。」

「カノンノ、カノンノ・イアハートですっ!!」

「そ、そうか……俺はレイド、ただのレイドだよ。よろしく（名前まではば一緒か……）」

こうして、ディセNDERを望む少女とディセNDERからカオスフレアになった青年はであった
少女は伝説を……

青年は救いを求めて……

闘
っ
て
い
る

ネタ的な輝く神話 その二（後書き）

べ、別に上手くまとめたつもりなんて無いんだからねっ！

まあ、気色の悪い発言はおいておき
軽く説明を

レイド君は、ステータス上はレベル1ですが、デイスガイアの転生システムを導入した結果がこれだよ。

なので、実質レベル255があります。

ただ、装備の必要レベルは適応されますが。

次、End of Summerについては簡単な話で、セブンスサマーのマルパクリです。

強いて言うなら、太陽RPGの指SMを耐え抜いた先にあるラビア
ンローズ同様にレベル分攻撃力が増加します。チート乙。

続きは……どうしようもない

天使ってなんだっけ？（前書き）

FEAR社の『エンゼルギア2nd Edition天使大戦TRPG』の二次創作で主人公がゴルゴしたり坂野サーカスする話ですが、戦闘なんて無かった。

天使ってなんだっけ？

ある日、俺の国は何発かのミサイルがやって来た。
街はよくわからない事になり、あれよあれよと言う間に、俺は……
親を失った。



【天使大戦エンゼルギア（メサイア）鋼の救世主？】



夏が近づく五月の終わり……俺は、『瑞穂第三中学校』の教室にいた。

退屈な授業に、何時もの日常……とてもではないが、世界を敵に回しての戦争している国とは、思えないよな。

ースパン♪

「こら、ちゃんと集中なさい？」

「うっす……」

「返事。」

「……はい、先生。」

ぼうつとしていたら、先生に怒られてしまった。

まあ、非は俺にある……義務教育は、受けることに意義があるんだ。
いくら、中身がオッサンでも外身は『中学二年生』の中坊なんだ

よな……

あ、自己紹介がまだな気がするな……俺の名前は『古嶋^{コジマ} 疾風^{ハヤテ}』。
元、統一帝国^{インペリアル}の大尉——いっぺんくたばってるから、墓には中佐
とあるだろうが——である、『ヴァン・ストレイド』とは俺のこ
と。

まあ、命令違反等で、懲罰部隊の隊長とかやらされてたんだけど
ね。

それが、今じゃ瑞穂基地のG3（統一帝国親衛隊）の第十三実験
部隊の少尉と来たもんだ……はあ、笑えん。

精神的なものは、この際いい……問題は肉体的な、直接的に言う
と『身長が足らん』のだ！！

畜生が、前は190オーバーな身長が、今じゃ162cmだよ。

あ、ここの板書き重要だな。

メモメモ……



午前の授業が一段落し、今はお昼時……俺の弁当を狙う悪魔から、
弁当を守る使命があるのだっ！！

「フッフッフ、相変わらず授業中に注意力散漫なはやてちゃんの
ガードなんぞ、このセラピアちゃんには通じないのだよ」

「あ、トウアレタ……弁当食おうぜ。」

「無視とは……グフウ。」

バカ（セラピア）は滅びた……俺の華麗なスルースキルを全開に
し、絡まないようにすれば良いだけの事よ。

俺のスルースキルを侮るなよ……娼館みたいな職場で、相手の誘いを尽くスルーしたのは伊達じゃないっ!!
さて、弁当を狙う悪魔は沈没した……後は、トウアレタと食べるだけだ。

「別に良いけど、その前に説教ね。」

「わお……（軽く藪蛇ったか？）」

遠く、白銀のクールガールこと『八坂^{ヤサカ}凍^{コオル}』に慰められている、瑞穂の正体不明少女『セラピア・パルマコン』が、某新世紀の神みtainな顔で計画通りみたいなどや顔してやがる……

後でへこますっ!!

「疾風っ!」

「イエスマム、自分は聞いているでありますっ!!」

今は、目の前の脅威を何とかしよう……腹を鳴らしながら、午後の授業は受けたくないから……

・・・ scene cut



―人物紹介―

名前…古嶋^{コシマ}疾風^{ハヤテ}

年齢…14歳

性別…男

絵に描いたような、軽薄そうな男だが、その実は面倒見がいいアニキ肌（本人は、断固否定している）である。

軽くばらしたが、彼は転生者であるが、この世界の中での話……ではない。

生前の彼は、外なる神の魔術が使えたり、無駄な殺生沙汰は嫌ったり、上官の命令は聞かないのが普通の問題軍人。

現在は魔術は使わないし、命令はちゃんと聞くことは聞く。

現在の軍での階級は少尉。

第四世代型人型戦車……通称『シュネルギア』のパイロットをしており、隊での役割は大口徑砲とミサイルによる支援砲撃だが、実は近距離が得意。

名前…トゥアレタ・クレーリオ

年齢…14歳

性別…女

メガネ、デコ、巨乳に委員長キャラという四属性を共生させた稀有なキャラ。

二人乗りのシュネルギアにおいて、疾風のパートナーをしている。ミサイルの扱いが上手く、高い空間把握能力で疾風の狙撃や支援砲撃を補助しているが、たまに彼女の補助無しでぶっばなす疾風に不安を覚える。

だが、普段から疾風にかかわれる為、そんなことを深く考える暇は無いようだ。

くその他く

セラピア・パルマコン

疾風からは『瑞穂基地の正体不明少女』と呼ばれている。

疾風の弁当（ご馳走）を虎視眈々と狙う食いしん坊として描写しました。

八坂 ヤサカ 凍 コオル

口数が少なく、銀髪という見た目から疾風からは、『白銀のクルガル』なんて呼ばれている。

表情を表に出すのは苦手みたいだが、セラピアを慰めたりと意外と優しい？

悪夢（前書き）

ある日見た悪夢……透明と鏡をキーワードに、俺は名伏し難き体験をした。

リハリビ作の第一弾、リアルに見た夢なので、若干まとまりに欠けます。

グロい表現がある為、苦手なお客様は戻るを推奨致します。
まあ、かなり淡白に書いていますがね。

悪夢

夏の残暑が残った感じのある日、友人の家があるマンションに訪れた俺は、変なアメシヨの猫を見かけた

アメシヨを白黒のシマシマにした感じの猫で雑種かね?……と思ったものの俺には大した興味を感じずにスルーしようとした

だが、猫は俺に興味を持ったのかよってくる様になぜか嫌な予感を感じた俺は、首にかけたタオルを猫じやらしみたいにして意識をそっちに向けようとした……勿体ないがタオルを投げれば猫もそっちに意識を向け続けるだろうと考えたが、またまた何故か投げたら『死ぬ』と思った

とりあえずどうしようか悩んでいたら、猫が飛びかかって来たからビビって避けたら俺は身体の穴という穴から嫌な汁が出てきた……何せ、猫がぶつかった先の壁が『透明になった』のだから

やべえやべえと身体がシグナルを、なんかやべえ逃げろ逃げちまえと提案する脳髓……従いたい俺だが、『このままじゃ逃げられない』と思った

何故なら、俺は猫に『目をつけられている』からだ

猫は逃げる俺を玩具にしていやがる……猫は任意のものを消せるよ。うだが、俺は確実に消すだろうとまたまた何故か確信している……夢の俺直感よすぎ

俺は粘りに粘り、時には何故か空いていた空き家の中でやり過ごしたりで、奥歯をガタガタ言わせてた。口から変な色の汁——多

分口を切った時に出た血と泡が混ざったんだろう——が出てて錯乱
なんか通り越して死にそうになった

そんな時、残酷なまでの救いが俺に与えられたんだよ。 赤の他人という、自分的に消えても痛くも痒くない存在がさ。

俺はその人にぶつかる振りをしてタオルを荷物にぶちこみ、マン
ションから逃げ出した。 後ろから断末魔が聞こえた気がしたが、
兎に角俺は逃げた。

ブラブラと商店街を歩いていた俺は、買い物していたお袋に会っ
たんだよ。 今晚なあにい？みたいな他愛もない話をしていると見
つかったんだよ、奴等に俺。

シマウマは許そう、だがレッサーパンダにアライグマ、犬や羊は
白黒だったらアイデンティティ的に良いのか？ そんな感想が出
てくる奴等が現れたんだよ。 奴等は、片っ端から人や物を透明に
していた。 ガ○ツか？ ガ○ツの夢かこれ？なんて混乱している
俺はプツンする光景を見てしまった。

……奴等さ、赤ちゃんとその母親を襲ったんだよ。 赤ちゃんは
全身透明になり、母親発狂。 その内、母親も消えた。 だめ押し
とばかりに、俺のお袋も両足を消して殺された。 俺は呆然として
いた、道端に停まった乗用車に乗って親の帰りを待った子供を全員
で貪り喰っていた動物達を見たら、逃げるという選択肢を俺は捨て

た。

何せ、子供の血が徐々に透明になっているだぜ？　それが、お前らの存在すら許さないみたいな悪意を感じて、俺は拳握って死にに逝った。

乗用車に駆け込んで、空いていた扉を閉める。　ロックをかけたら拳を無茶苦茶に振るう。　手に伝わる感覚が、俺に肉を貫いて骨が碎ける事を伝える……主に俺の。　手が使えないなら足、ダメなら口と無茶苦茶に暴れて、意識がとんだ。

――
――
――

俺は気が付いたら商店街にいた……なんか様子が変だが、まあ問題ないだろう。　お袋が探したと怒鳴り込んで怒ったが、俺はまあ良いやと思った。

暫く歩くと、鏡がある模型店があった。　俺はお袋に一言断りを入れて、模型店に入った。　お袋は俺に『鏡をしっかりと見なさい』と言われた。　首を傾げながらも鏡を見た俺は目が覚めた。

起きた後だから言えるが、意識が戻った先の商店街は、初めの商店街に対して、鏡あわせのようになっていた。　おまけに動物に喰われただろう母子がいた。　なにより……

『鏡には、俺以外の人間は写っていなかったのだが？』

……お粗末様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7017/>

秋永のネタ帳

2011年10月6日01時23分発行